



## 七 真夏の白昼夢？

今日は、珍しく一人で練習だ。荒木先輩も、中山先輩も、山田先輩も、夏休みなのに補修授業があるためだ。いつもの山道のコースを登り、展望台にゴールした。荒い息のまま時計を見る。タイムは約十五分。まあまあタイムだ。その後は、山の尾根に沿いに、アップダウンのコースを走る。日曜日ならば子どもたちの歓声で賑わう「はにわっこ広場」も、平日の夕方は誰もいず静かだ。誰もすべらない滑り台に寂しく夕陽が当たっている。

直人はそれらを横目に見ながら、緑で覆われたトンネルの中を抜けて行く。木の葉で覆われているため、昼間でも日陰で、夏とは思えないほどに涼しい。その中を直人は走る。土道はクッションが効いていて、膝にやさしい。自分の吐く息と足音だけが聞こえる。これまでに、クマにもイノシシにも出くわしたことはない。そのため、時折、樹林の中から聞こえる鳥の鳴き声と飛び立つ音にも驚くことはなくなった。かえって心が落ち着く。

鳥も虫もへびも木も枯葉も石も土も全て、この山の中で生きている。いや、石や土が生きていると言うのは変かもしれないが、この自然の中で存在している。その中を、ちっぽけな自分が走る。それでも、孤独じゃない。山の中に抱かれている。自然の中に溶け込んでいる。そんな気がしてくる。

目の前が明るくなってきた。角ばった、子どもの頭ぐらいの石が小山のように積み重なっている。古墳だ。こんな山の頂上に古墳があるなんて不思議だ。昔は、この山の頂上近くまで海だったのだろうか。古墳の石はこの山のものだ。下から登って来るコース上にも同じような石を多く見かけた。地産地消だ。

だけど、古墳を作るには一個や二個の石ではできない。百個、千個、それ以上の石が必要だ。集めるだけでも大変だ。昔の人はどうやって古墳を作ったのだろうか。トラックがあるわけじゃないし、ユンボがあるわけじゃない。全てが手作業だ。バケツリレーのようにして石を運んだのだろうか。いわゆる石リレーだ。

でも、古墳を作る間に、食べ物、食糧が必要だ。交代で狩猟や釣り、どんぐりなどの木の実を採取したのだろうか。でも、何のために。この古墳に入る人がそれほど偉かったのか。いや、それだけじゃない。人は他人のためだけに動けない。みんな、古墳を作りたかったのだ。自分の力で、みんなの力で、壮大な古墳を、建造物を作りたかったのだ。そこには壮大なる共通なる意思があったのだ。そうでなきゃ、こんなものを作れるわけがない。古墳に夢を見て、古墳に自分を重ね合わせたのだ。達成感。そう、今の自分も、早く走りたい、天狗になりたいという、強い意思が自分を走らせている。

古墳には今も石棺があるらしい。これまで、その側を走ったことはあっても、石棺は見たことがない。急に見たくなった。古墳の石を崩さないように足場に気をつけながら登る。石と石の間から植物が伸びている。てっぼうゆりだ。花はまだ咲いていない。古墳で一番高くなったところに石棺があった。石棺を守るかのようにてっぼうゆりが周囲を取り囲んでいる。花が咲くときにはポンと音がするらしい。古墳を盗掘する者を音で威嚇するのか。

石棺を覗く。長方形の石棺の中に人が入れるぐらいの長方形の穴が空いている。直人は石棺に触

れてみる。堅い。この石にどうやって穴を開けたのだろうか。この石よりも硬い何かで、何時間、何日もかけて、少しずつ穴を空けていったのだろうか。そのゴールが見えない永遠の取り組みに驚きしかないし、自分には想像がつかない。

ちよつといたずら心が湧いた。直人は石棺に入ってみる。直人は身長が百七十センチ。足首と後頭部がはみ出た。昔の人はもっと小さかったのだ。石棺に横たわって見上げると、青い空に白い雲が浮かんでいる。石棺の中の住人もこうして空を見上げたのだろうか。

目を閉じる。セミの音が聞こえる。つくつくぼうしだ。いつの間にか、クマゼミからつくつくぼうしに変わっている。もう、夏も終わりに近づいているのだ。甘い匂いが漂ってくる。花か。花の名前には疎いので、よくわからない。それよりも先に、自分の汗が臭ってくる。石棺からはぬくもりとひやとした感触が伝わってくる。日に照らされた箇所は温かく、日蔭の箇所は冷たいのだ。

こうして目つぶっていると、普段気付かなかったものが感じられる。それだけ、普段の生活は目に依存しているのか。それとも、気がついているのに気がつかないふりをしているのか。目からの感覚が強すぎて、他の感覚器官からの情報が薄まっているのか。

「キヤツキヤツキヤツ」声が聞こえた。それも子どもの声だ。小学生か？親は一緒じゃないのか？古墳巡りにでも来たのか？直人は目を開き、石棺から上半身を起こす。声がする方向を見た。声は一人じゃない。複数だ。一人？二人？三人？だが、おかしい。声はするけれど姿は見えない。

直人は石棺から這い出て、石を崩さないように古墳から降りた。声のする方に近づく。声はすぐ側で聞こえるのに姿は見えない。それでも子どもたちに近づこうと走る。確かに声は聞こえる。だが、やはり姿は見えない。

「君たち、何をしているの？」直人はできるだけやさしく声を掛けてみた。すると、声は消え、草むらを走る音が聞こえた。足音が遠ざかっていく。

「おおーい。待ってくれよ」直人は一瞬迷ったが、子どもたちの後を追い掛けることにした。別に子どもを掴まえる気はないけれど、子どもたちがどこに行くのかが気になった。親は一緒にいる様子はない。山の中で道に迷ったら大変だ。離れている距離は十メートルぐらい。すぐに追いつくだろう。相手は小学生？だ。だから、直人はタカをくくっていた。

子どもたちの走る音は古墳の先端から尾根沿いを下りて行く。直人も以前通った道だが、下り坂はけっこう急だ。古墳と同じ尖った石があちこちに突き出ている。慣れていないと危ない道？だ。その道を子どもたちが降りて行く。山道は木が覆いかぶさっているだけで、少し離れているだけでも姿は見えない。足が滑った。慌てて近くの木を掴む。ぐるりと体が一回転する。空中遊泳だ。

「あ、危なかった」直人はなんとか転ばないですんだ。

「あはははは」「あはははは」子どもたちの笑い声が聞こえる。こちらからは姿が見えないけれど、子どもたちからは直人が見えるらしい。子どもに笑われた。むかつとする。なんとしても子どもたちに追いついてやる。直人は坂道を猛然と掛け降りる。

「あははは」「あはははは」それでも、からかっているかのように笑い声が聞こえてくる。直人

はその声を追い続けた。

「ふう」目の前の木の枝が消え、直人はアスファルトに降りた。山道から道路に出たのだ。辺りを見る。子どもたちの姿は見えない。

「そんな馬鹿な」直人は首をかしげる。急坂をほとんど転びそうになりながら降りてきた。いや、落ちてきたと言った方がいいか。それにも関わらず、子どもたちには追い付かなかった。首をひねる直人。

すると、直人が降りてきた上の方で、子どもたちの笑い声が聞こえてくる。ええ？、と不思議に思いながらも、いや、どこかの藪の中で隠れていて直人が通り過ぎるのを待っていたのかも知れない、と思い直した。だが、どうして、隠れる必要があるんだ。謎が謎を呼び、疑問が疑問に重なるものの、直人には、再び、山を登り子どもたちを追い掛ける気力も体力もない。

「仕方がない。帰るか」右足を一步踏み出そうとした。ふくらはぎが痛い。アキレス腱が痛い。筋を痛めたようだ。直人は足をひきずりながら、ジョギングのペースで学校に戻った。後日、荒木先輩に山の中で聞こえた子どもたちの笑い声について話した。

「ああ、あれか。天狗の子ども、小天狗だろう」

「小天狗ですか？」

「そうだ。俺も山の中を一人で走っていると、子どもの笑い声が聞こえた時がある。その声を追い掛けるんだが、どうしても追い付かず、子どもたちの姿は見えないままに、結局、知らない間に山を下りていたことがあった。俺が辺りを見回していると、上の方から笑い声が聞こえるんだ。完全に遊ばれているに違いない」

「それ、僕も同じでした。でも、ほんとに小天狗ですか？」

「わからん。ただ、俺たちはそう呼んでいる」

「俺たち？ですか」

「ああ。俺も、中山も山田も、顧問の先生だって、聞いたことがあるそうだ」

「そうですか」

「ただ、その声は初心者には聞こえないんだ。ある程度、山の中で練習をして実力がつかないと、小天狗たちも寄ってこないみたいだ」

「小天狗たちは何をしたいんですか？」

「遊んでもらいたいんだろう。まあ、鬼ごっこじゃなくて、天狗ごっこかもしれないな」

「天狗ごっこ？ですか」

「ああ。天狗になりたかったら、着いて来いということだろう。まあ、直人も小天狗から遊びの相手と認められたんだから、よかったんじゃないか。ますます、精進しろよ」

「はい」と答えたものの、直人は腑に落ちない。納得できない。今度、山の中で、子どもたちの声、小天狗の声が聞こえたら、必ず追いついて正体を暴いてやるぞ、と心の中だけは意気込んだ。